

総務文教常任委員会会議録

- 1 日 時 平成28年2月10日(水)
- 2 会議時間 9時00分開会 16時13分閉会
- 3 出席議員 委員長：高橋政悦 副委員長：鈴木孝寿
委員：北村光明、木村好孝、口田邦男、中島里司
議長：加来良明
- 4 事務局 事務局長：佐藤秀美、係長：渋谷直親
- 5 説明員 教育委員会 教育長：伊藤 登
学校教育課長：上出 進、課長補佐：斉木良博
清水小学校 山下校長 秦 教頭
御影小学校 近藤校長 渡辺教頭
清水中学校 宝輪校長 伊澤教頭
御影中学校 寺島校長 宮脇教頭
- 6 議 件
 - (1) 所管事務調査について
学校現場における教育活動の状況について

 - (2) その他
- 7 会議録 別紙のとおり

委員長：（高橋政悦）おはようございます。本日は当委員会の所管事務調査ということで、学校現場における教育活動の状況について、大規模改修を行った中学校の視察と、その他の小中学校の訪問ということで、日程についてはお手元に配付のとおりとなっている。執行側については、本日協力をいただき大変ありがとうございます。時間もないので、早速説明をお願いします。

議件（1）所管事務調査について

①学校現場における教育活動の状況について

教育長：（伊藤 登）所管事務調査ということで、毎年のことではあるが、学校も一生懸命取り組んでいる。教育委員会としても学校と連絡を密にしながら子どもたちのため、学校のために色々と施策を展開している。

今日は所管事務調査ということで、大きく2点について説明をさせてもらい、質疑等で答えていきたいと思う。「特色ある町の取り組み」、「学力向上支援プラン」ということで、学校においても学力調査の結果と、改善についての保護者への周知状況等の説明があると思うが、教育委員会でも分析し、支援プランということで議会の方へも毎年提出している。結果は毎年変わっているが、内容的には全国の平均を上回っているという状況で推移しているの、継続していきたいと思う。

上出課長：資料説明 特色ある町の取り組み

斉木補佐：資料説明 学力向上支援プラン

委員長：説明を受けた内容について質疑はあるか。

北村委員：学力テストの結果で数学A・Bの全国平均のグラフが出ているが、資料の活用とは具体的にどういうものか。

斉木補佐：分野ごとに集計をしているが、数学Bは基礎的な問題ではなく、活用問題（考える問題）という部分があり、実際の問題を見ないと説明しにくいとその分野ごとに分けた中で資料の活用については若干低いものとなっている。

北村委員：具体的にいうと、表に数値が入っていてどうするかグラフを見て判断することか。

斉木補佐：数値が示されていたり、説明文があったりして答えを導くという設問だったと思う。

鈴木委員：幼保・小連携の関係で、中学校との連携はどうなっているのか。今後は中学校との連携が課題なのでは。私は子どもを持っているが、小から中への連携はあまり聞いたことがないので、どう考えているのか。

上出課長：今の課題は全国的にも「中1ギャップ」という課題がある。それは先生達も認識をしている。小学校の段階で課題がある子どもについては、中学校へ個別に伝達するようにし、英語や数学については中学校の先生が小学校に行き、小学生へ教えているという場面を設けて滑らかにしようとしている。小学校の段階で、クラス内での問題についても中学校へ伝わるように教育委員会としても学校へ促している。

鈴木委員：学力テストの数字については公表されないが、生徒への質問や学校の質問調査の結果は良いところ取りで、現実的に何が問題か全然分からない。子どもの意識調査や学校調査の結果の公表はできるのか。

斉木補佐：公表も全市町村がしているわけではない。それぞれの町の結果についても町として公表して、数値を出しているところもあるが、色々な意味や意義をもって公表している。北海道の部分では北海道が全道をまとめて説明責任を果たすという

ことで公表させてもらえるように市町村に同意を求めてきて、その中で同意しやすいように良いところ取りになっている。文科省が児童質問事項の集計をしたものが各学校にいつている。各学校の取り組みについては、それぞれの結果や状況に応じて取り組んでいる。道教委から年に数回指導が入り、確認をしながら各学校で取り組んでいる。

鈴木委員：結果に対して、教育委員会として把握できていない部分もあると認識しているか。

齊木補佐：各学校の集計は教育委員会にも来ているので、把握はしている。

鈴木委員：改善の取り組みについては教育委員会も一緒になってやっているのか、学校主体でやっているのか。

齊木補佐：指導幹が毎月学校訪問を行い、学力テストの結果が出た後の取り組みについてもチェックをしている。また、十勝教育局の指導訪問の際にも教育委員会が同席をしながら内容を確認したり、一緒に検討をしている。

口田委員：今日の日程がわからないとどこまで質問していいのかわからない。

委員長：説明された内容について質疑をしてもらおう。現場の対応については、現場に行ってからになり、あくまでも学校教育課長と補佐が説明したことのみ質疑をしてほしい。現場で校長先生が何を言うかわからないが、我々は町民とのつながりはあるが学校とのつながりはないので、町民の意見だけではなく学校側の不具合も把握することを前提に質疑をしてほしい。

口田委員：授業参観する機会はないのか。

教育長：参観できる。

中島委員：ここで聞くのか、校長に直接聞いた方がいいのかを整理し、時間の範囲内である程度収まるように委員長の方で時間の割り振りをして配慮をしてもらえれば、中身についての制約はしなくてもいいのでは。

委員長：それぞれの委員の意見を踏まえて、考えながら質疑を続けてもらう。

中島委員：スキーの授業が清水小学校では全廃することで取り組んでいると町内に周知されたが、これについては学校の独自性なので校長の経営権の中に入るのか。清水小学校だけがやめるとするのは、教育委員会の教育の部分で介入できないのか。私は全部やめると思っていたが、その辺を教育委員会としてどうとらえて住民に周知したのか。

教育長：その件については、学校長の専決事項という形の中で決めたという通知が教育委員会にきた。中学校でスキーを取り入れた時には、教育委員会としては何も介入をしていなかった。周知されてから知ったが、それなりの理由があり、学校長の専決事項だと判断した。北海道の特色としてスキーとスケートがあるが、両方やるのは大変だと思うが、できていた部分もあるのでどうにかならないかという話をしたことはある。再度皆さんの意見を聞きながら移行した方がいいのではないかとすることは言えるのではないかと思う。

鈴木委員：毎月 19 日は図書の日で本を読む日になっているが、昨年度と比べて学校図書への予算は増えているのか。また、清水町は読書活動推進計画の策定はされていたのか。

齊木補佐：図書備品の予算については平成 25 年度に読書の日を導入し、平成 26 年度に若干増額をして対応している。読書推進計画については策定していない。

委員長：日程表に従い、この後は清水中学校へ移動する。

【休憩 9：45】

学校訪問（4校視察）

【再開 15:57】

委員長：現場視察ご苦労様でした。さっそく本日の所管事務調査のまとめに入りたいと思う。まとめはどのようにするか。

中島委員：忙しい中、4校の校長、教頭に対応を願ったが、学校独自の経営もあり、ここでまとめをするのは難しいと思う。本来は良くないが、今回は一定の方向性を委員長、副委員長にお願いし、新年度予算では道外研修も含め、そういう部分ではそれをたたき台にして道外研修への方向を示せばいいのではないかと。

委員長：中島委員の意見だが、前回の委員会の時に学校教育関係として本州へ視察していきたいということで、今回の所管事務調査もそれに携わるものだとすることで選んだ。スケジュール的には3月定例会の時に行き先や内容等も明らかにして議会の承認を得なければならないので、それまでに各委員には本日の清水の現状を踏まえた上で、行き先や清水の教育方針や学校体制を変える若しくは伸ばすというところを委員会として調査をしたい。

本日のまとめは委員長と副委員長で3月定例会までには仕上げて、3月定例会中に委員会を開催し、具体的に行く場所等を特定したい。3月の定例会で今回の所管事務調査は継続ということで、時期的には東京清水会の方との交流や情報交換をする機会も生まれてくるので、その時期になると思う。5月の最終土曜日、若しくは6月の最初の土曜日とその日だということで、それに合わせてスケジュールを組みたいと思う。本日の所管事務調査のまとめについては、3月定例会までに委員長と副委員長で調整をし、状況を提示の上、目的の場所等での情報交換につなげたりしたいと思うが、それで異議はあるか。

中島委員：それで可能であれば問題はないが、東京清水会の日程はどうか。

加来議長：日曜日に開催され、午後2時から4時までに終わる。

中島委員：そこへ出ることによって、月・火と所管事務調査をして、2泊3日として予算は組まれているのか。

委員長：組まれている。

中島委員：公務とはいえ日曜日に出てもいいのか。

佐藤局長：申し出項目については今後協議するが、東京清水会の総会に参加するのは公務にはならないと思う。東京清水会の役員の方と別の場で懇談するということがなければ公務にはならない。

中島委員：月曜日に朝早くから所管事務調査に入れば前泊しなければならない。そういう発想をすれば局長が言ったことはクリアできる。所管事務調査を2泊3日の中で月曜日の朝から所管事務調査に入るのであれば前の日に行かなければならないというスケジュールの説明ができるように、それも含めて検討してほしい。

東京清水会を表に出してはいけませんが、総務文教常任委員会ではなく一議員としてそういう機会が必要ではないかと思う。

委員長：日曜日の午後2時からというのは決定なのか。

加来議長：向こうの都合しだいだが、通常はその頃にやっている。例えば、その日の午前中に役員の方と移住定住やふるさと清水会のあり方など、課題をもって所管事務調査として役員の方に話を聞いてみるなどして、午後からの総会には議員個人として参加するなど考えてみてはどうか。

委員長：町長と議長は毎年行っているのか。

加来議長：案内は町長と議長だけで、担当課から前日の手伝いとして一人行く場合もある。

委員長：東京清水会は日曜日なので、月曜日は朝から調査をするということになるので前泊になる。せっきくの移動日なので、時間があつたら東京清水会に移住促進の絡み、ふるさと納税の絡み等を絡めた上でそれを所管事務調査にするのか、議員としてそこに参加するのか。

北村委員：所管だったら産業厚生常任委員会にならないか。

委員長：総務文教常任委員会の所管になる。

中島委員：そこはお任せするので、ルールに沿ったスケジュールを組んでほしい。ここではこの程度でいいのではないか。

委員長：今言ったスケジュールでいく事にする。次の委員会で調査をしたいターゲットを聞く。今日はこの程度でよいか。

(いいの声あり)

委員長：本日の所管事務調査に関しては、次回の所管事務調査まで継続ということしたい。

(2) その他

委員長：執行側から議会報告会と町民との意見交換会に関する総務文教常任委員会の所管の対応一覧ということで、配付されていると思う。内容については後で見てもらえればいいと思うが、もしもっと練らなければならないということであれば次回の委員会で取り上げたい。他になければ本日の委員会を閉じる。

朝9時から皆さまお疲れ様でした。4校とも見るのは実際にきつかったような気がします。若い私でもそう思いますので、皆さまご苦労様でした。

【 清水中学校 開会10:00 閉会11:18 】

上出課長：まず、総務文教常任委員会の学校訪問で、最初に清水中学校を訪問した。流れとしては、校長からのあいさつの後に授業参観や校舎の大規模改修後の状況を見て、その後校長から学校経営の説明という流れになる。

宝輪校長：おはようございます。私事だが平成16年から平成19年まで本校で教頭として勤めていた。その後幕別町、豊頃町を経てまた清水中学校という幸せな進路を歩ませてもらっている。まず、先般3年生が議会を傍聴させてもらったことにお礼を申し上げる。総合学習の中で地域のためにというテーマで学んでいる中で議会傍聴をした。子ども達も色々な刺激を受けたようで、町のために自分も何かできることはないかと考えるいい機会になったのではないかなと思う。また、本校の大規模改修に対して心遣いをしてもらい感謝している。これから見てもらうが、何よりも温かい校舎の中で学習できることを子ども達は本当に喜んでいる。今日は時間のない中、できるだけ学校の中を見てもらい、何よりも子ども達が一生懸命学んでいる姿を見てもらいたいと思う。

(授業参観・大規模改修中の校舎見学)

宝輪校長：資料説明。

伊澤教頭：資料説明。

委員長：(高橋政悦)説明を受けたが、質疑はあるか。

鈴木委員：感想としては、まじめな学習風景でほっとした。教頭からの説明で学力向上の部分で聞きたいのは、6ページのグラフにあるように新しく取り組んでいるということもあり、今年はいいいよということなのかなと考えている。これだけジグザグするというのはその年よりの雰囲気、1年ずつ違うのはどう理解しているのか。

宝輪校長：何よりも違うのは調査の集団の違い。毎年違う学年、違う生徒を調査し、それをグラフにするというのは意味があるのかなと思う。子ども達が中学校に入ってきた段階で、ある程度の学習の習慣や生活習慣が固まってくるので、そこから中学校で改善を加えるが、なかなか進歩していかない部分もあり、集団によってグラフが波打つのは仕方がないのではと感じている。中学校は見方を変えると義務教育の出口なので、外へ出すために中学校3年間できちんと整えるようにしている。

鈴木委員：学年の雰囲気はなんとなくわかる。小学校と中学校の連携をこれからやっていくと聞いているが、どういう部分で必要性があるのか。若しくは、小学校高学年くらいから小学校と連携をしてそういう雰囲気に持っていくというやり方はあるのか。また、いい方法があるのかを教えてほしい。

伊澤教頭：勉強の方はかねてよりお互いに授業参観をしたり、本校から小学校へ行き出前授業として数学や英語などの中学校に上がった時に特に難しくなる科目を行っている。なかなか職員同士の顔が見ることができないということもあり、もっと職員同士の顔を見れるようにし、そこを通してより一層情報交換をしていくことによって、子ども達の円滑な学びに接続しようと考えている。実際に今年度からそれぞれの教員の窓口として小・中の連携担当を設け、先日も小学校へ出向いて1年間の連携のプログラムや6年生から中1への引継ぎを今までよりも綿密にし、一人ひとりについてのメモをつくっている。我々が出前授業をして児童に中学校の授業雰囲気を感じてもらい、我々は授業以外にも見に行き生徒の性格を把握するという事で、連携を深めようと考えている。

北村委員：1つ目は、9ページの生徒の弱点克服に向けてのところで、数学のA・Bともに正答率が全国的に高いという評価だが、課題として資料の活用や関数が低いと書かれている。資料の活用ということでもとくと図表やグラフを読み解く力で国語的能力なのか、文章を読解する力が低

いと改善策のところを書いてあるが、読書をする生徒も多いと違うところでは聞いているし、必ずしも国語力が悪いわけでもないのに、そこら辺はどういったところが考えられているのか教えてもらいたい。2つ目は、教育支援ボランティアの関係で、書道ボランティアはいるが、他にもボランティアはあるのか。担い手がいないから他の領域はないのか、それとも必要とされていないのか。

伊澤教頭：1点目、資料の活用等の話だが、問題は国語的であり、国語に社会的な問題が入ってきている状況。単純に答えるのではなく、決められた語句を用いて説明する、若しくは字数の制限というような条件でとなると難しくなってくる。わかっているがうまく表せないことが多いかなと思う。今度のテーマが思考力、表現力、判断力というところになっている。

北村委員：自分の理解していることや考えを表現するところが少し弱いという話があったが、そのアウトプットをするということを前提とした文章の読み方が課題なのでは。

伊澤教頭：そのとおり。2つ目のボランティアの関係は、本校では書写とスキー学習にボランティアをお願いしている。書写は順調だが、スキーの方は指導者が高齢になってきてボランティアの人材も難しくなってくるのかなと押さえている。また、他の部分に関しては、小学校よりは活用できていない部分があるのではということで、今後地域との連携を考える時にもう一度学習支援ボランティアを検討する必要があると思う。

北村委員：地域社会が学校へどれだけ教育支援できるかということで、今日的にはキャリア教育のことを考えた時に求められている課題かなと認識している。どこかの自治体で聞いた話だが、単に勉強の仕方や勉強を教えるだけではなく、勉強に対して苦手意識を持っている子に意欲を持たせるような支援活動や「よくできたね」と声をかけるなどをしていると聞いたので、そういった地域社会で貢献できるものはないのかなと私なりに考えていた。例えば、小学校でいけば課外活動で理科的なこととして生物の調査などを行っている人もいるが、なかなか学校の先生以外でそういうことをできる人はいないと思う。そういったこともコーディネートしていくには学校の先生がいなければできないので、そこに課題があるのではないかな。

中島委員：先ほど職員室の中を通らせてもらって、私個人的な意見だが、先生方の良い雰囲気を感じて期待をしているところでもある。一つ聞きたいところは進路指導の関係で、地元の高校があるという部分で先ほど小・中の連携という話が出たが、高校に行けば中学校の話も聞かすが、子ども達の進路として強制はできないが、地元の高校というメリットがあるのでその辺の指導についても何か特別なものを持っているのか。高校とはどのような話になっているのか。

伊澤教頭：高校との連携もとても大切だと思っており、高校の校長にも町内の校長会議に加わってもらって一緒に課題解決に向かっていくという取り組みをしている。昨年度から高校の先生に来てもらって授業をしてもらおうという取り組みをしているし、来年度に向けて考えていることは、3年生が全員で清水高校に行き、全員で授業体験をさせてもらおうという取り組みを考えている。また、中・高の連携ということで、職員がまず連携をするということで、高校の先生と本校の先生との顔合わせの機会を設け、昨年は4人だったが今年は16人で8人ずつの顔合わせができた。その中で出てきた話題としては、高校の書道部には素晴らしい作品があるので、それを本校で常設できるようにできないかなどを考えている。強制はできないが、地元魅力的な学校があるということを子どもに伝えることは今後大事なことだと思っている。本年度は推薦、一般を合わせて27名が清水高校を希望している。昨年度と比べて増えているので、今後も沢山の生徒に清水高校に目を向けてもらえるようにしていきたい。

委員長：時間になったので質疑を終了する。忙しい中、ありがとうございました。

【 清水小学校 開会11:28 閉会13:10 】

秦教頭から本日の日程についての説明

日程説明後A班は5・6年生の授業参観、B班は1・2年生の授業参観を実施。

(A班：鈴木副委員長、北村委員、木村委員、加来議長、佐藤局長、伊藤教育長)

(B班：高橋委員長、口田委員、中島委員、渋谷係長、上出学教課長、斉木学教補佐)

秦教頭：配布している資料に沿って校長と私から説明をする。始めに校長からの説明を行う。

山下校長：資料の説明（清水小学校の教育、学校経営）

秦教頭：資料の説明（学校評価の結果について、全国学力・学習状況調査の結果と改善について）

委員長：（高橋政悦）説明してもらったが、児童との昼食まで時間があまりないので質問等があれば受けたい。

口田委員：学力テストの結果について報告があり、おおむね全国平均を上回っている成績とのお話だったが、前年に行われているCRTテストの結果を見ると十勝では全国平均を下回っていたという結果が出ているが、そのあたりの分析は行っているのか。

秦教頭：資料の5頁の下に結果が出ているが、今の6年生が5年生だった時の結果が出ているが去年も上回っている。

山下校長：いまの6年生は非常に高くなっている。基本的な授業ができています。授業は初めに導入があり、展開があつてまとめという1時間のサイクルとなっているが、これがきちっとできるかどうかがある。意外と弱いところはまとめが簡単に終わってしまったり、発展教材を十分に取り入れないと学力に結びついていかないこともある。しっかりと入れて取り組んでいるところが子どもの学びの向上につながっていると思う。本校ではしっかりと取り組んでおり、学んだことが定着することと自ら学ぶという意識を持たせる取り組みを行っている。

北村委員：チームティーチングというのは全学級で取り組んでいるのか。

秦教頭：低学年については町独自の対応をしている。学級担任が進めていく中でどうしてもわからないという児童がいた時につくようになっている。4年生以上は北海道から加配を2名ももらっている。

鈴木委員：中学生の学力テストなどの結果からの傾向を見ると例えば、国語の読解力の問題が出てきている。これと問題というかこの町でも言われているのが家庭学習をしなければならぬとよく指摘されている。小学校の中で中学校の結果を見て分析を行ってキックバックしていく取り組みというのはあるのか。全く関係ないものなのか。

山下校長：小学校は現状の把握をして分析を行い、その学年に必要な力を付けて中学校へ送り出すというのが自分たちの大前提となっている。全国平均を上回っていることは小学生として必要な力を身につけているということになると思う。家庭学習については全学年行っている。特に高学年になればプラスして自学と言って自分で課題を見つけて取り組む習慣もされてきている。

鈴木委員：参考資料なども教育委員会にあると思うので参考にしながら進めていただきたい。

山下校長：中学校の教科書も見ながら進めており、おおよその概要はわかっている。

鈴木委員：自分の妻も以前図書サークルのプレコに入っており、現在の図書室の蔵書は間に合っているものなのか。

山下校長：蔵書の達成率100パーセントというのはどの学校でもほとんどない。毎年予算を付けてもらい本を購入しているが、古い本は廃棄していくローテーションがあるので少しずつの上積みはあるが大きく増えていくことは難しい面もある。現在65パーセントくらいの達成率になっているが、100パーセントになるのはかなり難しいものだと思う。子ども達にとってはここだけでなく移動図書館もあり、子ども達には十分な環境であると思

っている。

北村委員：知識がないところだが、生徒たちの机の並びについて我々の頃と随分と違うように見えたが何か理由や効果があるのか。

山下校長：目的によってコの字になったり形を変えている。まっすぐ並ぶこともあるが低学年は隙間を開けたりグループになったりもするが、基本的には子ども達と先生が直接かかわりあえる形であることと、授業中に見て回るときに見やすくなる環境を工夫している。必ず決められた形というものはない。

中島委員：スキー学習については回覧で見ているので承知はしている。ただ小学校の全てがやらないと思っていたら御影小は行っていて中学校も行ってきているようだ。そういった状況の中でクレームではなく希望としての意見だが、教育環境だけとなると清水小学校だけとなっている。文書の中にはスキー体験をさせることを考えていきたいとあるので中学校でも立ち話の中で校長先生からスキーを続けていきたいという話も聞いている。一度決めたことだが、小学校から中学校への結びつきという中を含めていつまでとは言わないが検討をしてもらいたい。実施してほしいということではなく、今一度検討してもらいたい。要望として話しておく。

山下校長：昨日と今日行われる職員会議の中で話をしたが、一つは教育課程の中では全校でスケート学習を行うということで冬のスポーツ活動は10時間位となっている。そのうちの5年6年生は全てスキーに充てているところだが、去年までの検討では将来全部スケート学習にするとされており、6年生においても全てスケートにするとされているが、中島議員も言われるとおり中学校とのつながりもある中で、体育の授業ではなく体験学習としてスキー学習を持つことにしている。体育にすると色々な体育があり、スキーにしてしまうと時間を持ってないこともあり大変な面もある。そこで特別活動で体験をさせて中学校へ行っても困らないようにしたいと考えている。1度2度だけでも経験するだけで違っていると思っている。来年までは6年生はスキーを行うがその後の体育はスケートを取り組むことにしている。

中島委員：要望なので、4つしかないわけだから。町内の校長会や教頭会でそういうものを、教育課程というのはここだけのものと共通している部分があるわけだから、さっき言ったようになるのでそういう部分で会議の中で情報なりを共有してもらえればという感じがする。会議がまたあるようなのでその部分も含めてということで終わらせていただく。

山下校長：給食後も質問等の時間が取れるのでよろしくお願ひしたい。

委員長：給食の時間になったので会議は一時休憩する。

【休憩 12 : 10】

5年1組・2組、6年1組・2組において児童と一緒に給食を食事。(別紙7頁)

【再開 12 : 43】

委員長：会議を再開する。

口田委員：外国語活動の棚田さんについて、私の近所にいる方だが彼女は入植してきたときからこういう面で活躍できないものかと考えていた。最近色々なところで活躍する場ができて大変良いことだと思っていた。ちなみにだが、この具体的な活動内容はどのようなものか。

山下校長：1年生から6年生までの楽しく外国語に触れる活動をしていただいている。非常に子ども達にはスムーズに楽しんで学習してもらっている。この活動は担任だけではできないことで、ALTと棚田さんの2人の先生が入り担任も一緒に授業を行っている。担任は2人の先生の活動をサポートしている。子どもだけでなく担任も勉強をさせてもらっている。買っていただいた教材を上手に活用しながら工夫して学習に取り組んでいる。年度初めに全体の計画についての打合せを行い、授業のある日は朝に打ち合わせを行っている。担任もかなり助かっている。

口田委員：遠慮せずにどんどん使ってもらいたい。

- 齊木補佐：英語活動の導入についての補足だが、25年度に当時の石川校長をリーダーとして小学校の先生方も入りプロジェクトチームで1年生から4年生までの1年間のカリキュラム計画を作っている。それを基に清水・御影小学校での授業に挑んでもらっている。その当時はALTが1名だったが、小学校低学年から英語に触れるというところで2名の外国人教師の体制としている。26年の4月から今の体制になっている。棚田さんについては保育所や幼稚園にも行ってもらっている。
- 中島委員：いまの英語の関係だがチェルシー市と国際交流をしている。最近会っていないが、小学校にも来ているのか。カリキュラムを作って取り組んでいるのであれば、時間を作ってもらい友好協会に申し入れて交流を進めてみてはどうか。1年に1回のチャンスしかないことなので是非時間を使わせてもらうようなことを考えてみてはどうだろうか。
- 北村委員：いまは民間交流だけのようだ。教育委員会として関われないのか。
- 中島委員：基本的に役所が行くと多くの制約を受けるが、民間での国際交流ということであればあまり制約もなく、やり取りができるのではないか。
- 北村委員：いま小学校ではローマ字は教えているのか。
- 山下校長：はい。
- 北村委員：小学校で教えるローマ字が日本語の英語の発音となって阻害の要因となっている。文科省の考えだろうか。
- 山下校長：たくさんの授業はない。数時間の授業。3年、4年生のパソコンの入力する時にローマ字打ちをする時に学習している。情報教育につなげている。
- 北村委員：日本語の場合は子音があって母音との組み合わせだが、ローマ字もそういう形になっているが、外国語は子音が続く場合もあって日本人は母音が必ず付くので日本語的発音になってしまう。誰もが英語を勉強するがなかなか話ができるようにならないところがある。
- 山下校長：なんとなく外国語であいさつができたり、英語でなんとなく話ができたりと少しずつ低学年から馴染んでいることはいいことだと思っている。
- 鈴木委員：家庭学習時間を定着させることが今後の、いや永遠の課題となってくると思うが、その中で北海道全般のことについて北海道教育委員会が出している「保護者の皆様へ」というものがあつたが、そういうものを踏まえてPTAの活動と連動した動きというのはあるのか。
- 山下校長：PTAにも話したことはあるが、校長として全校参観日の時に10分×学年プラス10分を目標としていることを話したことがある。町でも教育研究所においてそういうパンフレットを作り配布をしたこともある。家庭での学習が大事だということは継続して伝えている。学級通信を利用して伝えたりもしている。予習復習を踏まえてそれくらいの時間は必要だということは伝えている成果もあって、学習習慣はついてきているように思える。
- 鈴木委員：小学校も6年生から1年生までいるが、今言われるのは幼保、生まれた時から問題になっているのは親の教育。親の教育というのは体系的に行っていかなければならないところだと思っている。親が親になっていないという状態もよく聞くことでもある。PTA活動に巻き込んでいく取り組みも必要ではないかと思っている。非常に難しいものではあるが。
- 山下校長：幼保小の連携は今年で11年目を迎えて、その中で幼保と小学校の指導者同士が保護者に伝えながら生活リズムやいい勉強ができるような環境を整えることができている。理解してもらう努力はしているつもりだが、話を聞いてくれるのは一生懸命な方が多く、手が回らない方は学校へもなかなか来てくれないところもあり伝わらないところもある。担任をとおして少しずつ保護者や家庭に伝えて協力していくことがこれからも必要だと考えている。一生懸命な家庭とそうではない家庭の二極化してきているところもある。答えになっているかどうか。
- 北村委員：給食費を払えない家庭などはあるのか。
- 山下校長：ない。教材費が少し遅れるようなことはある。
- 北村委員：教師としての心得12というのがあるがとてもいいものだった。これは大抵の学校にあるのか。

山下校長：私が校長になるときに何か必要だと自分なりに感じて、資料等から引き出して作ってみた。初めは10だったが12まで増えた。この中の1つでも2つでも構わないので意識して子ども達と関わってもらいたいと思っている。特別なことではなく、当たり前のことを書いている。先生方には当たり前のことを当たり前にできる教師であり、社会人であってほしいと思っている。

北村委員：不易と流行というのが理解できなかった。

山下校長：教育の大事なところは変わらない。新しいものが入ってくることも大事だが、学校でも時代の流れが速いので得てして流れのそれだけに乗ってしまう方もいる。それだけではなく、ベースが大事だということを守りながら、新しいことを取り入れていきたいと思っている。

委員長：5頁にある清水小学校だからできる教育というものを具体的に聞かせてもらいたい。

山下校長：色々なボランティアや関係機関と協議しながら事業を行っている。先生方には継続していくということを必ず言っている。単発にはならない。具体的には1年生から6年生まで色々と特色ある授業を行っており、食育に関することや性教育や薬物、防犯に関することを行っている。それを6年間でトータルして行うことで全ての力を付けて中学校へ上がってもらうという考えを持っている。特色あるものに対しての力を身に付けるための教育をしたい。これまでは学校は単発な学習を行っていた場でもあった。外からこれをやってくれと言われて1年で終わり、また次も違うものを1年ということが多く、必ずこの学年においてはこれを行うという教育課程を守るということが必要だと思っている。

委員長：今後この総務文教常任委員会が次の調査に入るターゲットとして考えているところでもあるのだが、清水小学校へ他町から子どもを呼ぶには何の特色を出せばいいのかというのは現場から見ると何か思うところはあるだろうか。現実問題とは別として教育者としての何か策があれば聞かせてもらいたい。

山下校長：町の売りとしては幼保小の連携を行ったり、少人数学級を行っていることは清水小学校の特色だと思っている。また、特別支援も他の学校と比較してずっと充実している。言い方は悪いが、他の学校では手を掛けられない子ども達を先生方が調整し合いながら色々な先生が関わって一人の子どもをみんなで育てていくという姿勢が組織となっている。それがわが校のすごいところで他の学校よりもずっと優れていると思っている。そこがわが校の売りだと思うが、なかなか表には見えてこないところでもある。他の学校の先生から聞かれると清水小学校の少人数学級と支援体制は評価されている。支援部というものは他の学校にはないが新たに作り、他の学校とは違うという認識はされている。それが保護者まで届いているかどうかはわからないが、いまの地域の校区の保護者から言われているのは丁寧に説明や活動を行っている姿が見えているので非常に理解をしてくれている。安心して中学校に上げられるとも言われている。外へのアピールになるかはわからないがそういう良い面がある。

委員長：町では移住促進という事業に取り組んでいるが、その担当課が表に出しているのが子育て支援として医療費を無料にするなどを前面に出している。それは事実として行っていることだが、その他に小学校・中学校の特色を移住促進のきっかけとして表に出す事は問題ないことか。

山下校長：少人数や幼保小について出すことは問題ない。出すことは良いことだと思う。それだけ子どもに手をかけて支援をしているイメージがあるので強みになると思う。

委員長：時間となったので清水小学校の調査はこの辺とする。本日は忙しい中ありがとうございました。これからまだ2校の視察があるが、先ほど言ったようにカリキュラムがつながる学校を目指して学ぶ環境ということで調査は継続して行っていく予定でいる。その第1弾としていい勉強ができた。大変ありがとうございました。

【 御影小学校 開会13:33 閉会14:26 】

上出課長：まず、校長先生からあいさつの後授業参観をし、学校経営の説明をしてもらう。
近藤校長：御影小学校へようこそ。御影小学校は地域とともにある学校ということで、地域の皆さんや議会の皆さんには本当に助けられながら学校運営をしている。児童数が一時期100名を切るくらいまで減ったが、現在は146名となった。来年の1年生は少し人数が減るので少なくなるかと思うが、140名はいる。職員が21名と以前から見ると教員の数も増え、職員室にはびっしり机が入っている状態。特別支援学級も増えたので、教室も仕切りながら進めている。今年5月1日には開校100周年を迎える。これも皆さんに応援してもらえたおかげで御影小学校も清水小学校と同じように100周年を迎えられるのかなと思う。11月26日に式典・祝賀会を予定しているので、新年度に入ったら急ピッチで準備を進めていく。職員や子ども達と共に力を合わせながら、また自分達でできることは進んでやろうということで、学校を良くするために頑張っている。そのことを踏まえながら授業を見てもらいたいと思う。その後に詳しい説明をする。

(授業参観)

鈴木委員：授業参観をさせてもらい、ありがとうございます。学校経営等の冊子の説明をお願いします。

近藤校長：資料説明

鈴木委員：質疑はあるか。

口田委員：授業参観で返事の仕方が「うん」となっているが、今はそうなのか。

近藤校長：返事は「はい」と教えている。

委員長：皆が一斉に「同じです」と言っていたが、その意図は何か。

近藤校長：声を出すようにするため。

委員長：逆に言うと「同じです」と言っておけば問題ないと子ども達は思わないか。また、声を出すためだけのために言わせているのか。

近藤校長：一応意思表示として皆で同意しながらやるが、委員が言うように反対意見は出てこなくなるかもしれない。

渡辺教頭：一人ひとりが今やっている課題に対しての意識を高めるために反応することから、先生達が学習状況ということで校内で統一した。「違う」「付け足す」など他にも反応の例もある。

委員長：言葉を限定することによって、個性をつぶすことにはならないか。表現力もあれば表現の仕方はそれぞれ違うので、それを一律にすることによって生徒を一律にしてしまいたい意図があるのか、ただ単に参加させるきっかけをつくっているのか。多分きっかけづくりだとは思うが、それが正解なのか。

近藤校長：教師としてはどちらかというと、学校で皆が何かを言うと「はい」という返事がくると安心する。これがどうなのか、教師の自己満足ではと言われても、まずは子どもに反応してもらいたいというところがあるが、そこら辺は注意深く考えていかなければならない。

鈴木委員：全国学力学習状況調査の結果で、御影小学校であれば傾向が出てくるが、弱いところに対する対応や対策、教師間での話し合いや会議はあるのか。また、対

策は今までどのような形をとっていたのか。

渡辺教頭：生徒指導交流会で生徒の弱いところや生活指導を共通理解していき、常に学年の状況がわかるようにしている。

近藤校長：ただ、御影は 20 人くらいの母体なので、その年によって色々な子どもがいる。沢山の中で薄まるのではなく、一人ひとりの個性が強くて出てくると思う。それぞれの子どもに応じて指導はしていくが、その年によって変動があるのかなと感じる。

鈴木委員：先に清水小学校へ行ってきたが、結果の中の対応で例えば道教委で出している総括を見ていくと、家庭学習を基本的に身に付けるのは小学校というところで、校長先生の寺子屋の学習として親御さんに対する参加者や反応はどうか。

近藤校長：いつも参観日の時に学級懇談を行う前に私の方から 20 分ほど話をしている。言うことは基本的な生活習慣で、それをするによって家で勉強をする習慣が身に付くので家庭学習をしてほしいという話をしている。学校としても昔に比べたら宿題が増えた。それに加えて、自主的・主体的なということも言われているので、低学年のうちは先生からの宿題を一生懸命やり、中学年くらいになると両方、高学年になると自分からとなるが、なかなか自分からは難しいので、御影の場合は宿題が多い。

北村委員：地域の教育支援ボランティアの領域が多いと聞いていたが、外部講師の方で熱心な方がいるのか。

近藤校長：清水からも来てもらっている。子どもの人数がボランティアを呼んで活動するのにちょうどいいのかなと思う。また、子ども達が大人と触れ合うこともするし、その中で感謝の気持ちを育てたり、色々なことが一つの活動の中で育っていくのではないかな。

北村委員：ごみ拾い遠足というユニークな取り組みがあるが、これは伝統的なのか。

近藤校長：毎年 6 年生が御影から歩いて芽室公園まで行き、帰りは列車で帰ってくる。恒例というよりは、去年やって褒められたりしたという話を聞いているのでやっている。一つの積み重ねが次へつながっているんだと思う。

鈴木委員：御影小学校と清水小学校で、校長・教頭は交流があると思うが、一般の教員同士で交流はあるのか。

渡辺教頭：授業交流や教科ごとのサークルがある。

鈴木委員：それでは最後に高橋委員長からあいさつをお願いします。

委員長：お礼のあいさつ

【 御影中学校 開会14:35 閉会15:03 】

寺島校長：限られた時間なのでこれから授業を見てもらうが、今日はインフルエンザで1年生が学年閉鎖になっている。2、3年生のみだが学校の様子を見て、色々な意見をいただきたいと思う。

(授業参観)

鈴木委員：資料説明の後、質疑を行う。早速資料説明をお願いする。

寺島校長：資料説明。

宮脇教頭：資料説明。

北村委員：数学のAとBの関係で、数学的な見方や考え方の部分が全国平均で正答率が低いという話だが、この結果は学校によって差があるのか。

斉木補佐：データは御影中学校の分しかきていない。

北村委員：清水中学校と同じ傾向があるのか。

斉木補佐：活用の部分も全国平均を下回っている。

北村委員：結果は清水町全体を見て、御影中学校や清水中学校で対策を考えていると思っていた。

次に、女子の体力の関係で、スポーツをする機会が男子に比べて少ないのではないかという傾向が小学校くらいからある。御影は昔からホッケーを一生懸命やっている地域で、男子中心にやってきたのかなと思う。女子の体力を向上するための取り組みは、小学校、中学校を通じて連携していなかったということになるのか。

宮脇教頭：このデータは中学2年生のデータなので、学力の場合は学校全体がよくなっていけば良くなるが、体力の場合は学年によって差があるので、一概に原因が何かは言えない。運動不足もあるかもしれないが、本校の場合は部活動にほとんどの子が参加しているので、体育の先生と話しているのは、恐らく体の使い方や柔軟性の部分が落ちているという仮説を立てている。今の1年生、3年生は運動能力が高くなっている。

斉木補佐：教育委員会として説明していなかったが、体力については北海道も全国の中で低いので、各市町村に対して体力向上に取り組むように通知がきており、学校側は大変な思いをしている。体力向上については、去年の5月に教育委員会からも体力向上に向けての通知を出している。体力調査については結構前からやっていて、昨年から公表する予定だったが、平成26年度は公表しなかった。道教委からも色々要望があり、公表の部分も含めて前向きにどう取り組めばいいのか5月に出して取り組んでいる。

平成27年度の結果については、小学校では合計すると全国を少し下回っていて、握力とハンドボール投げがちょっと上回り、あとは下回っているという状況だった。ただ、運動が好き、得意という答えは割と多く、好きなんだけれども能力的に全国的に比べると少し下回っているという状況になっている。

中学校についても男女共に全国平均を下回っている。ただ、女子については若干去年よりは上昇傾向にある。中学生についても、運動が得意、好きと答える男子は全国より多かった。女子については若干運動が苦手、体力にあまり自信がないが多かった。教育委員会としては、このような概要でまとめており、次年度以降については体育の授業や登下校プラス部活動を含めて体力向上にあたってもらいたいと通知を出そうと思う。

口田委員：ゲームをする時間やパソコンの指導はしているのか。

寺島校長：外部から講師を呼んで指導をしている。担任が中心となって時間の使い方の指導を保護者にもしている。先日の小学生の1日入学の時に新得警察署から来ていただき、インターネットの誤った使い方をしてはいけないと保護者に説明をしてもらっている。

口田委員：学校へスマホを持ってくる生徒はいるのか。

宮脇教頭：中学生の携帯電話の持ち込みはできない。

鈴木委員：26頁の正答率の推移に関して、清水と御影が一緒になったらすごいだらうなど。清水は国語と数学が逆になっている。清水中学校と御影中学校でバランスができればいいのかなと思うが、先生方の勉強会や対策会議はあるのか。

宮脇教頭：現時点で中学校の連携は教科についてはしていない。お互いにどういう状況かわからないので、委員が言うように中学校同士の交流はこれから必要になってくると感じている。

鈴木委員：家庭学習の習慣化は小学校の方でも悩んでいるところで、中学生になっても変わらないものなのか。去年の資料では30・40パーセントくらいが予習・復習をしていると自己回答しているが、その推移は変わらないのか、若しくは先生方の指導やPCDAをどうやっているのか。

宮脇教頭：家庭学習については、中学校に上がった4月、5月は宿題も膨大で、教科によってはやらないとついていけない状況があるので、だいたい4月、5月はいっぱいいっぱいになっている。そういう中で小・中の連携や学校だけでは難しいので、家庭との連携も必要になると思う。本校の場合でいうと、家庭学習は半分以上行っている。質と量で見ると時間が短かったり、宿題だけで終わったりして発展しないということがある。先生方としても学校全体で何を目的に課題を出すのかを統一し、できるだけやりやすく、毎日90分を目指して質の良い宿題の出し方の工夫・改善を課題として取り組んでいる。

北村委員：教育の四季の中では、季節や年間を通してのスケジュール、それぞれの課題をわけてやっているが、例えば1日のスケジュールで、朝にできるだけ勉強をするという目当ては持っているのか。

宮脇教頭：現時点で、一人一冊生活記録ノートをつけている。それには1日のスケジュールを自分で計画を立ててやるように指導しているが、皆同じような勉強で、切り替えになっていないところが課題になっている。

北村委員：私たちのようにリタイアした人は1日の使い方が仕事をしていた時よりも難しい。学生の場合は学校のスケジュールに合わせて行うが、それ以外の時間の使い方はどのように考えるべきなのか。受験が近くなってくると夜に勉強するようになり、夜型になる。年をとると夜より朝に勉強した方がいいというのがよくわかった。

宮脇教頭：1日のスケジュール管理は先ほど言ったように、課題に取り組まなければならないかなと思う。学年や基礎をつける前にもよるので、担任や教科担任から指導はしているが、なってみないと本当にやらなければいけない、決めなければいけない面というふうにはなかなかならないのが現状だと思う。

北村委員：誰かを教育する時に教え方の問題や技術も含めて色々と議論されるが、教わる方ができている人とできていない人の差が出てくると思う。今は勉強の仕方を先生方が教えるが、私の時代では教えてもらっていない。親が勉強の仕方を指導したりしていた。

寺島校長：本校の場合、今日もガイダンスということで最初に行っている。特に4月に入ってからはこのように授業を進めていくということで、1年間の学習する内容のシラバスということで冊子にして出している。5教科で勉強の仕方がわからない生徒を集めて、アドバイスをする機会を設けている。

北村委員：例えば、英単語が弱い英語の語順が不確かなどところがある子にどのように覚え

させるか、対策は持っているのか。なぜそうなるかという、英語になるとセンテツを覚えていないから。私の経験からいうと、中学校の時は皆で英文を朗読して覚えたが、いずれやらなくなる。やり続けたから英語ができるようになるので、途中で辞めた人はだんだん英語が嫌いになる。1年生は皆英語が面白く、記憶でいくとだんだん苦手な科目になっていった。学校の教え方にあったのでは。

中島委員：改善方策で5項目あるが、4項目までは学校の中が軸になる。5つ目の放課後等における補充的などがあるが、平成27年度に改善となっているが、まだ実施はされていないと思う。今までこれについて学校内で協議をされたことがあるのか。非常に難しいと思っているが、部活との絡みもあるし、放課後に先生が対応するという意味でただ単にすぐ簡単にできるものではないと思うのが、この辺を教職員の中で話題として協議したことはあるのか。

宮脇教頭：協議し、教科によって一斉指導の放課後サポートという意味ではなく、個別の対応をやっている。協議した中で、一斉はやはり無理だということで、例えば数学のここが落ちているということで、呼び出して部活の時間を少しもらい、生徒とコミュニケーションを取ってサポートに入ったりもしている。漢字のテストなどで合格点までいかない生徒を呼んで再テストをやり、だめなら3回4回、最後は昼休みに職員室でとしている。また、夏休みや冬休みに短い4日間くらい午前中に部活を行い、午後には先生方が交代で入り、学習サポートということで勉強会を行っている。

中島委員：すでに実施している部分があるということか。

宮脇教頭：満足するところまではいかないが、先生方はそういう意識が高い。

中島委員：先生方がそういう意識を持って子どもに対応しているということは、放課後だけでなく授業中も個々で気配りしているだろうと思う。職場として放課後まで子どもと接しないで済ますことは、教室内であればある程度補完できると思う。そういう部分で先生方が一生懸命取り組んでいるのか。これからレベルアップという部分で、ちょっと遅れ気味の子を何とか普通点まで、3年生になると受験の対策として進路指導の中で、確実に志望校に行けるという学力向上の方法。先ほどからいうように軸がないので、学校サイドで補完してあげなければそういう部分に達してこないだろうと思う。進路に向けて何か特別なことをやっているのか。

宮脇教頭：今の3年生については、受験に向けて勉強でわからないところは先生に聞きに来て、放課後5時くらいまで勉強をしている子も何名かいる。それに対して、先生が対応をしている。

中島委員：子どもが自ら学ぶ力が付いてくるためには、先生の情熱を子どもは必ず感じていると思うので、勤務という点から外れる部分もあるかもしれないが、うちの町の子ども達に心からの力添えをしてもらいたい。

委員長：アンケートQ Uを平成27年度に行われたと聞いているが、その成果について教えてもらいたい。

宮脇教頭：校長から説明があったが、その子が学級の集団の中で居心地がいいかどうかを可視化したテストで言葉は悪いが、いじめられやすい、落ち込んでいたり、生活しづらい、学校に行きたくないなどがグラフになって出てくる。職員の中で生徒指導交流会があり、そこで先生が実際に生活している様子を見た場合と、グラフで見た場合のギャップが出てくることもある。その場合にこの子は本当はこんなところを困っていたのかというのが会話に出て、その子に対してどう対応しているかということで、各教科や部活の先生が対応してきた。2回目の結果を見るといい方に上がるが、一概に全部を信用できるテストではないけれども、気づくという面では非常に効率がよく、見やすいグラフなので、そういう部分では子どもの成長に合った指導が細かに行き届くことで、実際に何人かはそれで上にあがって、楽しく学校生活を送っているという状況になっている。

委員長：教育委員会へだが、このアンケートQ Uは御影中学校だけなのか。

齊木補佐：平成 26 年度に各学校と協議をした中で、学校側から Q U をやりたいという話があり、各 4 校に話しかけをしていて 4 校ともやりたいということで予算計上していた。ただ、実際の実施にあたっては、なかなか教職員の理解などの部分もあり、御影小学校は実施できていない。

鈴木委員：時間が来たのでこの辺りで調査を終了する。